

おんな維新物語

岩尾光代

第五部 「城外編」

第二章 夫の斬首と奇跡の逃避行 異彩の幕臣 小栗上野介の妻

小栗道子

榛名山（群馬県）の西南山麓を流れる烏川の上流域に、権田村があった。現在は高崎市の一部だが、権田地区の水沼河原に、大きな石碑がそびえ立つ。

（偉人小栗上野介罪なくして此所に斬らるる）
死後六十四年たつて建てられたものだが、歳月を経てなお、慕う人たちの無念が「罪なくして」と刻まれた碑文に込められている。

小栗上野介忠順は、幕臣として異彩を放った人物だ。近代的な横須賀製鉄所（維新後に造船所と改称）を造り、遣米使節として米政府と堂々と渡り合った事跡が残る。司馬遼太郎をして「明治の父」と言わせながら、なぜか歴史から抹殺されてしまった。

慶応四（一八六八）明治元（一八六八）年一月、鳥羽伏見の戦いに敗れて江戸城に戻った將軍慶喜は、朝廷への恭順を表明した。これに対して徹底抗戦を主張した勘定奉行の小栗上野介は、職を解

かれて領地の上野国権田村に引きこもった。

すると間もなく、小栗邸を二千人の暴徒が襲う。小栗が幕府御用金を持っていてという「風説」にあおられたものだとされる。小栗はかねて村の若者を江戸邸で学ばせ、家臣とともにフランス式の軍事訓練を行っていたので、組織的に暴徒を撃退することができた。小栗が、いくつもある領地の中から権田村を終のすみかを選んでしたのは、村人たちの強い絆があったからだ。しかし、さらなる「追撃」が小栗を襲う。中山道を江戸に向かっていた東征軍（東山道総督府軍）が、小栗に反逆の疑いありとして、高崎藩など三藩に追討令を出した。権田村に向いた使者は、小栗の説明に納得したとしながら養嗣子の又一を釈明させるために高崎藩に進行した。東征軍の姿勢が厳しいことを察知した小栗は、村人を集めて家族の脱出と、その護衛を願う。目指すのは親しくしていた会津藩である。

村人は護衛隊を急いで組織して、密かに小栗と家族を脱出させた。だが小栗自身は、「人質」となっている又一と村への後難を考えて戻り、そのまま捕縛される。取り調べもなまま翌日の閏四月六日に斬首された。享年四十一。なぜ小栗を急いで殺したのか。その謎はいまだ解明されていない。小栗が幕府の金を隠した

とされる「埋蔵金伝説」があつて、現在も「宝探し」が続いているが、関連は根拠に乏しい。むしろ、小栗抹殺を理由づけるために、意図的にそんな「風説」を流したのではないかと、新政府の謀略さえ疑ってしまふ。

小栗と別れることに道子夫人は抵抗したが、夫に諫められてようやく出立した。このとき道子は、数え三十歳で妊娠八カ月だった。

道子は播磨林田藩主の建部家から小栗に嫁いだ子供に恵まれず、小栗の従妹・鍼子を養女としたところ、結婚十八年でようやく妊娠した。道子の写真はないが、「衣通姫」とあだ名される美人だったという。

村からの護衛隊員の中には 会津方に加勢して戦死者も

道子たちには村人二十一人（うち女性二人）が付き添ったが、東征軍は家族と家屋敷の徹底搜索を命じ、小栗が斬首された閏四月六日、裏山の竹藪に潜んでいた道子を、搜索隊長の吉井藩士が見つけた。絶体絶命の道子だったが、隊長は突然に「見逃してやるから、早く落ち延びよ」と告げた。

（隊長は）妊娠中であつたのを憐れみ（従者に命じて）奥方を草刈籠の中に容れ、周囲を芝草で掩い人目を憚り、交る交る担いで権田を落ち延びさせた」と、旧碓氷郡の史書（『碓氷

郡志』旧群馬県碓氷郡発行）にある。

九死に一生を得た道子の、苦難の逃避行が始まった。直後に夫の理不尽な死を知ることになるのだが、窮屈な籠の中で、どんな思いを抱いていたことだろう。

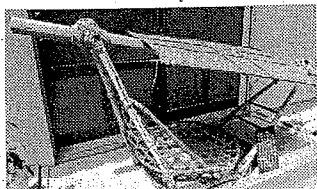
道子は綾姫と呼ばれた幼いときに小栗の許嫁となつて、十一歳の頃、小栗家に入ったという。道子は夫に、兄のような親しみを持つて連れ添ってきたと思われる。穏やかだった暮らしたが、幕府の瓦解を機に急転した。なんとしてもおなかの子を守って生き延びねばならないと、絶望のなかで一筋の希望に託した強い決意を抱いたにちがいない。

「奥方は立派な人だった」と、宿を提供した祖父から聞いていた古老の証言が、わずかに道子の気丈な姿を伝えている。

草津街道から脇に入り須賀尾峠を越え、越後攻略を目指して展開する東征軍を避けて山道を進む。草津温泉北東の野反湖（当時は野反池）のほとりに、道子がようやく喉を潤したという「小栗清水」の立て札が、いまも立つ。山籠籠



道子が会津で産んだ国子。晩年の肖像（東善寺提供）



和光原集落（現・群馬県中之条町）へ山現から秋山郷（現・長野県栄村）山越えをした時に道子を運んだ駕籠。和光原の山田家が保存、在は東善寺収蔵（東善寺提供）

に乗り、背負われ、ときに歩いて、道子は峠をいくつも越えた。老母と養女の組と二手に分かれたり、別動隊で追手を攪乱したりしながら、一行は新潟に向かった。信州と越後にまたがる険しい山道は戦国時代の上杉謙信が信州攻めに通ったルートに重なるという。道子の足跡を、作家の小板橋良平が昭和四十年代に踏破したが、百年後でもその道のりは険しいものだ。

一行は新潟で、会津藩領酒屋村陣屋の副元締を務めていた秋月梯次郎を頼った。秋月はかつてパリ万博幕府使節の一員になったとき、小栗の江戸邸でフランス語や西洋事情を学んでいた。道子や母の邦子らとも旧知の仲だった。

秋月の手配で、道子たちは船で小阿賀野川を上つてから越後山脈の谷間を縫う会津街道に入り、閏四月晦日に会津藩若年寄、横山主税の邸にたどり着いた。権田村を脱出して二十六日目のことだった。

横山はこのとき二十一歳、折しも道子一行が到着した翌日に白河口で戦死してしまふ。邸に帰ってきた亡骸を出迎えた道子は、弔問に訪れた前藩主の松平容保の助言で、南原に仮設された野戦病院へ移った。六月十日、ここで道子は長女の国子を産み、近隣の村に隠れ住むことになる。会津は落城、権田村から来た護衛隊の中に

は、戦闘に参加して戦死した者もいる。

道子は翌明治二年春、江戸から名を変えた東京に戻った。道子たちを日本橋浜町の別邸に引き取ったのは、三井組中興の祖とされる三野村利左衛門だった。両替商の三野村は若いときに小栗家に奉公した縁で、後にも交流があつた。慶応二年に幕府から百五十万両の用立てを命じられた三井の危機に際しては、小栗に交渉して「十八万両分納」（三井八郎右衛門高棟傳）にし、その功績で三井に入り中核となった。

三野村は明治十年に病没し、さらに明治十八年に道子が亡くなった。国子は東京専門学校（後の早稲田大）を開いたばかりの大隈重信に引き取られ、婿を迎えて小栗家は存続する。大隈夫人の綾子は旗本の三枝家出身で、小栗上野介は綾子の従兄にあたる。

明治三十八（一九〇五）年、日露戦争の日本海海戦で勝利した東郷平八郎提督は、小栗が横須賀造船所を造ってくれていたおかげだ、と子孫を招いて、その功績をねぎらった。

小栗の非業の死を思えば、道子が会津にたどりついて、高齡出産を果したことは奇跡のようだ。死を背負った崖っぷちで子を得たため、りあわせに、生命運鎖の不思議を思ってしまう。

小栗上野介の墓は権田の東善寺にあるが、東京の雑司が谷霊園にも「小栗家累代之墓」として建立されて、上野介と道子、国子夫妻らの名が墓碑に刻まれている。

いわお・みつよ 歴史ジャーナリスト。1946年、群馬県生まれ。毎日新聞社で『1億人の昭和史』編集に10年間携わった。著書に『新しき明日の来るを信ず』『はじめての女性代議士たち』として文庫化）、共著に『続維新の女』『幕末維新の美女紅涙録』など